

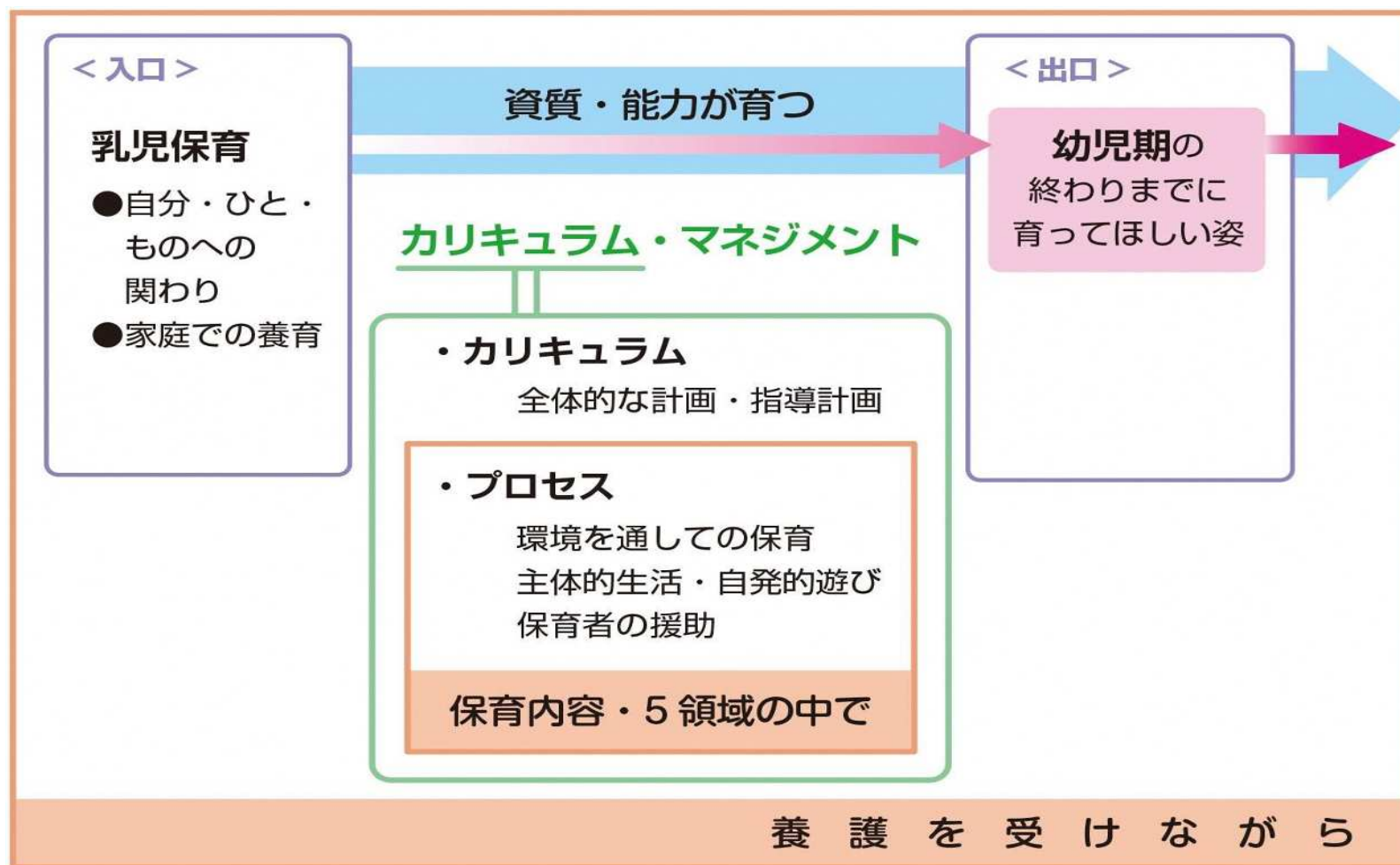
非認知能力の育成： 幼児教育(保育)を通して

無藤 隆（白梅学園大学）

本日の小講演

- 1)最初に幼児教育(乳幼児保育)の考え方を解説し、小学校以上の捉え方と対比する。（この考えは日本やOECD等で共通する。）
- 2)最近の心理学・発達科学の捉え方から、認知能力(認知スキルとも呼ぶ)と非認知能力(非認知スキル、社会情動的スキル)の発達と重要性を述べる。（背景としての研究が2000年代入り、国際的に増えてきた。）
- 3)特に、非認知能力の発達について、最近の発達心理学・発達神経科学の研究を踏まえて、自己コントロールの概念から整理する。
- 4)認知および非認知の能力を育成する幼児教育の考え方を論じる。
- 5)幼児教育に関わる行政として望まれることについて述べる。

幼児教育の構造



幼児教育の資質・能力

(1) 「知識及び技能の基礎」

豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かったり、できるようになったりする

(2) 「思考力・判断力・表現力等の基礎」

気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする

(3) 「学びに向かう力・人間性等」

心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする

1歳児の挑戦する姿



5歳児の工夫と話し合い



幼児教育のネットワーク的な（網目状の）学び、 小学校以降のリニアな（系列的）学び

保育（幼児教育）と小学校以上の教育と対比して、学びのあり方の違いとして次のように整理できる。

ネットワーク的学びとリニアな学びの違いである。

小学校の学習は教科ごとに直線的（リニアな）系列を想定し、その前のことを理解して次に進むようにカリキュラムを細部まで作り、その通りに進めていく。

たとえば、足し算があり、引き算があり、かけ算があり、そして割り算となっていく。

幼児教育での学びとは①

幼児教育での学びをこうとらえることができる。

大きな意味での発達的な変化はある。たとえば、無自覚的なところから徐々に自覚へと進む。また、表面的な理解から仕組みの理解へ進む。ただ、それ以上の細部の順序性を想定しない。

たとえば、雪や氷が冷たい、手に乗せていると溶けてくる、雪や氷は水なんだ、といった気づきはその前にどういう気づきがあり、その後、どういう気づきがあるべきだとは想定しがたい。

幼児教育での学びとは②

算数の基盤について、いろいろなものを数える中で、小さな数の範囲の中で、計数と足し算、引き算の基礎が形成される。(系列的な学びはその基盤の上に成り立つ。)

それは体験活動を中心とし、しかも園の環境での出会いから始まるので、その都度の機会があって成り立つ学びだからである。それらの学びが互いに少しずつ繰り返しを通して繋がり、網の目状の知識が構成されていく。

認知能力と非認知能力を育てる①

認知能力とは知的な力である。そこには、知識・技能、思考力などを含める。

非認知能力とは意欲・意志、また自覚し見渡す力、人と協力する力などを含める。つまり、学びに向かう力の育ちである。

どちらも、乳幼児期（とりわけ3から5歳児）さらに学童期・思春期を通して育つものである。

認知能力と非認知能力を育てる②

認知と非認知は相互に関連し、支え合って、育っていく。

1つの活動の中に認知面と非認知面が必ず含まれ、共に育つ。

いずれも資質・能力の基礎を保育のプロセスとして捉え、
子どもが意欲を持って取り組み（学びに向かう）、
様々なことを見いだし（気づき）、
試行錯誤しながら工夫すること（思考力の芽生え）が生まれ、
発展していくのである。

非認知能力とは（研究のまとめ）

- 主に意欲・意志・情動・社会性に関わる3つの要素からなる。

- 1) 自分の目標を目指して粘り強く取り組む。
- 2) そのためにやり方を調整し工夫する。
- 3) 友達と同じ目標に向けて協力し合う。

特に幼児期（満4歳から5歳）に顕著な発達が見られるが、その後、学童期・思春期の発達を経て、大人に近づく。

気質差、個人差が大きい。

自己をコントロールすることが基礎にあるが、それは認知と非認知の両面を必要とする。

教育を通して育成可能性があることが分かってきている。

自分をコントロールする力の発達①

- 非認知スキルとは（OECD）。他者とうまくつきあう能力、自分の感情を管理する能力、目標を達成する能力。
- 幼児期の研究から、特に目標を達成する能力、その中でも実行機能が重要。
実行機能とは、目標を達成するために、自分の行いを抑えたり、切り替えたりする知的な能力が思考および情動（感情）システムに影響を与えることである。
- 実行機能には、感情の実行機能と思考の実行機能がある。

自分をコントロールする力の発達②

- 感情の実行機能とは本能的な欲求や感情をコントロールして目標を達成する力。

幼児期の終わりに向けて欲求を抑える力が発達する。さらに欲求を抑えるための工夫が5・6歳になるとできるようになる。（その後も成長が続く。）

- 思考の実行機能はついついやってしまう行動、習慣、癖などをコントロールする力。

基本要素として、その状況で必要とされる目標を保ち続ける。いくつかの選択肢から一つの行動を優先する（特に選択されにくい行動を優先する）。行動や活動を切り替える。5・6歳になると前もって切り替えの準備ができるようになる。

非認知的力が育つ幼児教育の場面とは

たとえば、こういう活動の中で特に**非認知能力**が現れ、伸びていく。

- 部屋でも庭でも散歩でも何にでも興味を持って関わろうとする。
やりたいことを思いついたら積み木でも縄跳びでも何度でも挑戦し工夫してやり遂げようとする。
- ドッジボールなどのルールを自覚し、新たなルールが一つ加わったらそれを守って遊ぶ。
- してはいけないやり方と、してよいやり方が分かったら、よいやり方を用いるような工夫をする。
- 工夫するとき友達と相談する。
- 先を考え、目標を立てて、それに向けて回り道でも何とか進めていく。

乳幼児期の教育（保育）とは（まとめ①）

- 子ども（特に満1歳前後以降）は、①環境での出会いから学ぶ、②大人から学ぶ、③子ども同士から学ぶ、と多面的に広がる。
- 親（保護者）との安定した愛着をベースとして、それが次第に保育者・仲間へと広がる。
- 3歳以降、仲間集団での学びが大きくなっていく。一対一の親しい関係から集団としてのルール（規範）の学びへと発展していく。
- 保育者は、直接的教示も、見守りも、また導き（ガイド）も場合により使い分けていく。

乳幼児期の教育とは（まとめ②）

- 子どもはどの環境においても、**興味**を持ち、**気付き**が生まれることを通して学んでいく。そこに体系性は必ずしもないが、あちこちでその都度に学んでいることが次第につながっていくようになる。
- **つながりを付ける**ことは、以前のことを今につなげ、またこれからどうするかを**予期して計画する**こと、また並行して行うことを結びつけるなどを通して生じる。
- 幼児期の終わりに近づくにつれて、**直感的理解から言語的理解へ**と移行していくが、その始まりは体験で見出した気付きを言葉にする試みから始まる。
- それとともに、**自分が選んだ目標に向けて工夫し努力する意志の力**が育っていく。
- とりわけ**言葉の豊かさ**が重要だが、それは感じ考えることを言葉として、ものを使いつつ**対話する**ことで言葉が感性とまた思考に根付く。また**大人**による**言い換え**や**絵本**や**言葉遊び**がそれを**言語的自覚へ**と発展させる。

教育行政として望まれること ①

- 幼児教育(幼稚園、保育所、認定こども園)は、国による大綱的な規制の下で、自治体が大きな権限を担う。
- 公立と民間、幼稚園と保育所と認定こども園などと制度や監督のあり方が分かれているが、次第に特に自治体レベルにおいてその幼児教育の管轄を統合していく必要があるだろう。
- 都道府県レベルと市区町村レベルの権限等の違いを踏まえつつも、その緊密な連携により、幼児教育(保育)の質を高めていく。
- 単に預かることを越えて、幼児期にふさわしい教育として、その中味の充実を目指す。

教育行政として望まれること ②

- 東京都などにおいて「**幼児教育センター**」を設立し、各園の研修や保育の質の向上を支援している。
- 各種の研修が量的に増大しているので、その中味が確実に各園の教育（保育）の質を上げていくように、**受講機会**や**受講方法**や**カリキュラム**の整備を支援する。
- 各園の**自己評価**を促進し、その教育(保育)の**質の向上**に結びつけるように支援する。
- **小学校の低学年教育**において**幼児教育の成果を生かして**、その時期にふさわしい教育として質を上げることを目指す。
- 既に幼児期に家庭による**学習機会の格差**が生まれている。**言葉の質量の違い**などもおそらく顕著になっているはずである。その支援を幼児教育施設で行えるようにしていく。